

子どもの視点から見た「教科・母語・日本語相互育成学習モデル」に基づく学習支援教室 —M-GTA を援用した子どもの意識変容プロセスの探求—

黄 怡君

学位取得年月：平成 20 年 3 月
取得学位名：人文科学修士
学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】教科・母語・日本語相互育成学習モデル、言語少数派の子ども、母語喪失、教科学習困難
【要旨】

言語少数派の子どもが直面している母語喪失や教科学習困難の問題を解決するために、「教科・母語・日本語相互育成学習モデル（岡崎 1997）」が提案されている。それに基づく学習支援教室に参加し、そこでの学習体験を通じ、学習支援教室に対する位置づけが変容した 3 名の子どもがいる。本研究では、その変容プロセスを解明することを目的とした。そこで、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチで子どものインタビューのデータを分析した。その結果、学習支援教室での中国語の使用は教科・授業内容に対する理解を促進させ、学習意欲を高め、安心感を与えるという役割があり、それが子どもの学習支援教室に対する位置づけを、【勉強を助けてくれる教室】から、【一人ひとりを大切にしてくれる教室】に変容させた最大の要因であることが示唆された。

(こう いくん)

日本語母語話者との遠隔音声会話から観察した 文構造の特徴と変化 —台湾人 JFL 学習者の事例研究—

洪 玉苓

学位取得年月：平成 20 年 3 月
取得学位名：人文科学修士
学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】遠隔音声会話、文構造、単文、複文、台湾人 JFL 学習者
【要旨】

本研究は、遠隔音声ツールは日本語学習者の産出力に影響を及ぼすかを検証することを目的とする。Skype という無料オンラインチャットソフトによる日本語母語話者と、計 15 回連続的に遠隔音声会話を通じ、台湾の四年制大学を卒業した 1 名の日本語学習者(JFL)を対象として、産出した文構造の特徴及び変化を調べた。「単文」と「複文」の基準に従い観察した結果、会話初期に単文による発話は非常に多いことが見られ、中後期段階でもこの特徴は変わらなかった。複文の下位分類の使用状況を観察した結果、副詞節、並列節、補足節、連体修飾節といった順に習得が進んでいることがわかった。各範疇の構成能力が、会話を重なっていくことにつれ、徐々に向上している様子が観察された。

(こう ぎょくれい)